

Reidun Aambø

ノルウェーらしさとは無礼を意味するか？

Typisk norsk å være uhøflig?



Reidun Aambø

ノルウェーらしさとは無礼を意味するか？

Typisk norsk å være uhøflig?



HØGSKULEN I VOLDA



MØREFORSKING

2017

Author	Reidun Aambø
Translator	Ayako Yamada
Publisher	Volda University College
ISBN	978-82-7692-339-1
Type set	Ayako Yamada/Geir Tangen
Illustration	From the book <i>Is Rudeness Typically Norwegian?</i> , illustrated by Akin Düzakin.
Distribusjon	http://www.hivolda.no/hivolda/forsking-og-utvikling/publisering/hvos-skriftseriar

ノルウェーらしさとは無礼を意味するか？

Reidun Aambø

はじめに

この本には英語、ドイツ語、ノルウェー語で書かれた、同じ内容のテキストが含まれています。

本文は、ノルウェーの礼儀正しさのコードについて、広範囲に言及することを目的としています。それは例えば、身近な環境や社会的な関係の中であったり、仕事場や旅行先であったりします。

読者対象のグループは、学生として、労働者として、または観光客としてノルウェーに滞在する外国人です。また、このテキストは、ノルウェー語を外国語として勉強している人々にとっても、役に立つものとなっています。

ノルウェー人読者は、ノルウェーの文化やふるまいが、どのように見なされているのかを、より深く理解することができるでしょう。なぜならテキストでは、外国人学生や移民が、ノルウェー国内外にいるノルウェー人に対して、どのような印象を持っているのかについて、多く言及しているからです。

本文ではさらに、研究、仕事、プロジェクト、海外旅行から得た、自らの経験についても詳しく書きます。それでは、お楽しみください。

ノルウェー国立ヴォルダカレッジ、2008年1月

ライドウン・オンブー

Reidun Aambo

翻訳：山田絢子

Ayako Yamada

この本のアイデアとなった2つの話

何年か前に、ノルウェー国立ヴォルダカレッジのエチオピア人学生が、自国でのノルウェー人の援助活動について、文章を書いた。そして医療・伝道施設の古い記録文書から、次のようなことを引用した。

「昨日、ノルウェーから私たちの元へ、赤ら顔の男がやって来た。彼は、私たち全員を侮辱しながら、歩いて回った」。

モンゴルから来たある学生は、故郷ウランバートルでの、次のような話をしてくれた。

「現地の人たちとより良い関係を築くために、ノルウェーの救援活動の人たちは、モンゴル人をパーティーに招いた。多くの大人と子どもが、そのパーティーに来た。参加者たちは食事をして、楽しい時間を過ごした。パーティーの終わりに、ノルウェー人たちは、それぞれの家族にプレゼントを配った。それは絆創膏、包帯、ガーゼなどが入った、赤十字社の救急箱だった。モンゴル人たちは、お礼を言って、家に帰った。家でプレゼントの中身を見て、彼らはショックを受け、そして腹を立てた。その後、私たち若者は、この団体の催し物に参加することを許されず、人々はそのエピソードを何年も語り続けた」。

このエチオピアとモンゴルでのノルウェー人たちは、何を間違えたのだろうか？医療・伝道施設での、赤ら顔のノルウェー人のどのような言動や行動が、良くないと言われたのだろうか？

おそらく彼は、ノルウェー的には、礼儀正しいことをした。身分、年齢、階級を考慮することなく、男女問わず、握手をしたのかもしれない。何か陽気なことを言おうとしたのかもしれない。あるいは、子どもの頭を、ポンと叩いたのかもしれない。

そしてモンゴルの救援活動の人々は、確かに各家庭の役に立つ、気のきいた贈り物をしようとしていた。それは、ノルウェー的な考え方の中では、最善のものであった。しかし、贈り物が彼らの意図したとおりに受け取られるとは限らない。

善意のノルウェー人たちはきっと、贈り物としての絆創膏や包帯が、モンゴル人の病気や事故を望んでいるという意味になることを知らなかったのだろう。

ノルウェー人がノルウェーに住んでいる間は、前述したエチオピアやモンゴルのノルウェー人たちのように、そこまで完全な誤解を受けることは無かった、

と私たちは言えるかもしれない。

1970年代までずっと、私たちはノルウェー文化とは、ほぼ同質のものであったと言うことができた。そこでは、人々がだいたい同じ学校教育を受け、だいたい同じ宗教を信仰し、だいたい同じ理想や基準を持っていた。

同じラジオ番組を聴き、同じ祝日を祝い、たいていは自分の国で、休暇を過ごしたり働いたりした。近頃のノルウェー人は何度も、そして長期間、バカンスや仕事、留学のために海外へ行く。

今日の、いわゆるノルウェーらしさとは何なのかを定義するとき、それは1970年代のことを指しているわけではない。その当時、住民はおおむねノルウェー人と、パキスタンからの外国人労働者から構成されていた。2007年、ノルウェー国内には、200以上の国籍と、それ以上の多くの文化や言語が存在する。

以前、おそらく私たちは、ほぼ同質の文化の間で生きることを必要としていた。そのため、ノルウェー人はとても礼儀正しい、と言うことができたのだ。今のノルウェーで、何が礼儀正しいと見なされるのかは、もちろん明確ではない。

多文化社会の中で、私たちは誤解し、誤解される危険性がある。その理由として、人々が特に、礼儀正しさや社会的な関係の異なるコードを持っていることが挙げられる。

礼儀正しさ ～王宮の生活から日常生活へ～

Falk と Torp という人物は、語源学の辞書である *Etymologisk ordbok*(1992) で、*høflig* (礼儀正しい) という言葉は、古いドイツ語の *hovelik* と *höflich* という言葉と、同じ意味合いであることを示した。

ノルウェー語にはまた、中低ドイツ語の *hovesch* から借りた、*høvisk* (そして *det som høver seg*) という言葉も含まれる。

さらに、古ノルウェー語には、フランス語の *courtois* や *la courtoisie* (つまり、宮廷で使う礼儀作法、*à la cour*) から来た、*kurteiss* という言葉もある。

礼儀正しさを他の言葉に置き換えると、優雅な、教養のある、思いやりのある、洗練された、親切な、行儀の良いといった言葉になる。

親切なふるまいをすることや、場面に応じて様々な表現を持つことが、礼儀正しさを意味するのであれば、ノルウェー人を特別礼儀正しいと考える人はほとんどいないだろう。

ノルウェー人はよく、スウェーデン人の方が自分たちよりも礼儀正しいと言う。より礼儀正しく、より上流階級的で、少し堅苦しい、と付け加える人もいるかもしれない。

ノルウェーとスウェーデンという、文化的に非常に良く似た国同士を比較したとき、スウェーデン人が、強い貴族とフランスの王子たちから受け継がれる礼儀作法を確立していると思うのは、当たり前のことである。なぜなら、王子たちはフランスの王室から、自分たちの作法や様式を持ち込んだからだ。

そのため、他の文化、男女間の役割と共に持ち込まれた国内外の話、暮らしの事情、産業、気候、宗教と接触するという要素が、礼儀作法を含む、文化的様式の成長の役割を果たすことは、明らかであると言える。しかし、これらの形式はもちろん、一定不変ものではない。

礼儀正しくふるまうということは、たいてい理想としての話である。礼儀正しさは、私たちの言動や行動の中、そしてどのように表現し、ふるまっているかの中に示される。

しかし、礼儀正しさとは何も言わず、何もしないことであるとも言える。そして何が礼儀正しく、洗練されていて、行儀が良く、受け入れられるものと見なされるのかは、文化によってかなり異なる可能性があるだろう。

私たちは、様々な状況に合わせた礼儀正しさのコードを必要としている。そしてあいさつ、訪問、食べ物、食事、贈り物などに関しての、いくつかのコードを持っている。

ディスコで、教室で、葬式で、コミュニケーションをとるために、私たちはそれぞれ異なる礼儀正しさのコードや方針を選ぶ。

家庭内や職場でも、礼儀正しさや好意を示すために、様々なふるまいや表現が必要とされる。

友人と会話をするのか、それとも知らない人と話すのかどうかで、私たちはコードを使い分けることを求められている。そして性別、年齢、身分は、多かれ少なかれ、その役割を果たすことになるだろう。

つまり私たちは、その場の状況、コミュニケーションを取る相手や取引を行なう相手、話しているテーマ、そして自分たちの立場に応じて、言葉や表現、形式を選んでいくことになる。

これは私たちが母語で、自分たちのいる環境内で、無意識的に行なっていることである。しかし、外国文化の中で、正しい場所での正しい表現、正しいジェスチャーや行動、またはその全てに関して、たいてい問題を抱えることになる。

ボディランゲージと顔の表情もまた、礼儀正しさと無礼さに関係している。そしてその解釈は、文化によって異なる。

どのくらいの時間その人を見ているのか、その人のどこを見ているのか、手や口、鼻はどのような動きをしているのかといったことは、決まったサインを相手に送っている可能性がある。

礼儀正しさのコードは、生まれつきのものではなく、文化の中で学ばれるものである。一般的に、それらは明文化されたものでもない。そのため外から来た人は、知らない文化の礼儀正しさを理解するのに苦労するはめになるのだ。

それは、人々が未知の感覚をおぼえ、配慮に欠けたり不安になったりするような、全く異なる価値観体系や礼儀正しさのコードであることが多い。コードを間違えることは、多かれ少なかれ、コミュニケーションが成り立たないことを理解し、思い知ることに繋がるだろう。

礼儀正しさは、正しいのか間違っているのかではなく、何を期待するのかに関係している

文化は、何が礼儀正しいと見なされているのかを教えてくれる。全ての人々が、自分たちの文化の中にあるような、礼儀正しさや好意と同じサインを探し求める。これは、自然なことであると言える。なぜなら、それは自分たちが知っていて、なじみのあるコードだからだ。

もし、他の国を訪れたとき、同じサインを見つけることができなかつたら、そこに住む人たちを礼儀正しくない人間だと結論付けるだろう。つまり、何を礼儀正しいと見なすのかは、その文化が私たちにどのようなふるまいを、良くて親切であると教えているのかによる。

何かを無礼でふさわしくないと思うとき、当然ながら自分たちも同じように思われている可能性がある。しかし、そのことを私たちは、自分たちの持つ文化的期待を裏切る行為だと考えるだろう。

さらに、なじみのない、ぼんやりとした感情は、たいていお互い様の関係にある。もし、ある人やある環境を、奇妙でなじみのないものだと感じるのであれば、そのときは自分も同じように見なされているのだと理解しなければならない。

礼儀正しさの基準を作ったのは誰か。ある人や文化が礼儀正しい、または無礼であると見なされるとき、次のように問いかけることができる。何に関係してい

るのか、そして誰が関係しているのか。

例として、キューバ人を無礼だと考えていたアメリカ人が挙げられる。確かに、次のようなことを付け加えるのであれば、そう言えるかもしれない。列に並んでいるとき、追い越したり、ぶつかったりする度に、アメリカ人は **Excuse me** や **Sorry** といった言葉を求める。そのようなアメリカ人の礼儀正しさの期待から外れたキューバ人は、無礼となりえよう。

しかし、私たちはキューバでお客様として、いわゆるキューバ式の礼儀正しさや好意を経験する。そして現地の人たちは親切で、手助けをしてくれて、人との付き合いに積極的であるという印象を持ち、また、よく豪快に笑うという印象も持つ。

ちなみに、当然ながら、キューバ人たちを同一視することはできない。それは、他の文化の人々に対しても言えることである。

なぜ、私たちは礼儀正しくありたいのか？

私たちは、礼儀正しく装うために、意識的にも無意識的にも、高いモチベーションを持っていると言える。

例えば、他人からの印象を良くすることや、自分たちを思いやりのある人間に見せることは望ましく、有用であると考えよう。そして良いしつけを受けていると示すことや、自分たち自身の、あるいは両親の不名誉を望まないこともまた、同じように言えるかもしれない。

礼儀正しさにはまた、他人との関係が上手くいったり、取引を行う相手が十分に尊敬されていることや、正しく理解されていることを感じたりする効果も期待される。

そして、私たちの成し遂げたいことに対して、相手が愛想よく、親切にしてくれるという効果も、同じように期待される。

もし、その場に相応しい、友好的な手段を身につけたのであれば、それは信頼という名の扉を開く役割を果たす。そしてその信頼と共に、私たちはより良いコミュニケーションや理解を得る。

人は生きている限り、どこに住んでいるのかにかかわらず、個人として、正しい方法でコミュニケーションを取り、それが正しく伝わることを望んでいる。そしてお互いに正しく理解し、理解されることも望んでいる。

それに加えて、国際政治の中で、他文化の価値観やコミュニケーション手段を理解しないことの危険性を、私たちは知っている。

礼儀正しさは、深い関係や友情を必要とせず、人と人との間に距離を作る手段ともなりうる。行き過ぎた礼儀正しさは、おべっかや皮肉、滑稽なものに終わるかもしれない。

ノルウェー人は、気軽さと礼儀正しさを共に持ち合わせているのか？

私は、文化について特別な専門家ではない。しかし、研究や仕事、プロジェクト、海外旅行からの経験を持つ、好奇心旺盛な人間と言える。

私の最も重要な異文化体験は、ノルウェー国立ヴォルダカレッジに通う17歳以上の、77の異なる国の、約430人の外国人留学生たちから得られるものだ。移民や彼らの子どもたちによって書かれた文語的な文章は、この取り組みに、インスピレーションや刺激をも与えてくれた。

自分とは異なる環境や文化を持つ人々と接することは、私により多くの比較対象を与え、以前よりもたくさんすることに気づかせてくれた。

しかし、ノルウェー人として、ノルウェー文化の特徴を評価し、見ていくのは簡単なことではなかった。少なくとも、客観的であるとは言い難い。

そのため、後述するように、いくつかのノルウェーの特性について言及するとき、それが説明や弁明だと見なされることもあるだろう。

研究者たちは、北欧の人々が、強い類似のイデオロギーを持っていると考えている。社会民主主義的な政治体制の長い伝統は、ノルウェーに爪跡を残した（例外的なものとして定義された個人が、似たような理想と同時進行的に、存在しているにもかかわらず）。

そのため、誰かが目立とうとしたり、金持ちであることや自分の身分をひけらかそうとしたりするとき、それはたいてい不愉快な、または滑稽なことだと解釈される。そのため、ノルウェー人にどれくらい稼いでいるのかを尋ねることは、失礼にあたるだろう。

伝統的に見て、金持ちかつ有名なノルウェー人は、庶民的であることを示していると人気が高い。彼らはたいてい、つつましい生活を送っているだろう（くたびれた服を着て歩く、古い車を持っている）。つまり、自分たちが普通の人であ

ることを示すために、様々なやり方で、地味な暮らしを選んでいるのだ。

裕福なノルウェー人は、家に使用人をめったなことでは置かない。そして、ノルウェーで最も金持ちである人物の一人は、釣りに出かけ、波止場で釣った魚を自分で売る、と言い出すかもしれない。

裕福な家の若者は、一般的に言って、自分の望むものを全て与えられているわけではない。彼らは、自分の欲しいものを買うために、週末や夏の間アルバイトをすることもする。

ノルウェーの大富豪の一つの典型として、山に15もの浴室を備えた、かなり大きなセカンドハウスを持っていることが挙げられる。と同時に、外にトイレがあるセカンドハウスを山の上に持ち、古い防寒用上着を着て歩き、木製のスキー板を使うようなタイプの大富豪もいるだろう。

ノルウェー人は、高い給料をもらっているにもかかわらず、よくペンキ塗りをしたり、裁縫をしたり、ベリーを摘み取ったり、自家製のジャムを作ったり、料理をしたり、庭を整えたりする。

そのため、外国人が自分たちの手を汚すような仕事を全くしないことや、使用人が全ての食事を作ることを得意げに言うとき、私たちはそれを肯定的に評価しない。

庶民的であることは、私たちの自己像と理想を伴う。ノルウェー人はオーラヴ国王が70年代の石油危機の間、(少なくとも一回は) ترامに乗ったことを誇りに思っている。

テラスハウスに住んでいた首相もいたし、彼らはボーディーガードなしで歩くこともできる。女王や国王の子どもたちは、他の子どもと一緒に公立の学校へ行く。そして教会や公共の建物は、そこまできらびやかではないと言える。例えば、外国人観光客がオスロの王宮を鉄道駅であると間違える事態は、たびたび起こる。

以前、ある外国人アナリストがテレビ番組で、ノルウェーの真面目さは、この小さな国が国際的に尊敬を受け、世界の他の国々で平和の交渉役として信頼されていることの、最も重要な理由であると主張した。

しかしここ数年、ノルウェーの真面目さや弱者のグループとの連帯意識が、弱まる傾向にあることが見て取れる。平和を愛する国としてのノルウェーの自己像は、今日では独善的なものとも解釈される。

例えばノルウェー人は、ノルウェーが世界の他の国々のお手本になるべきだということを、自分たちが最もよく分かっていると思っているだろう。

類似性や平等の考え方は、他人に対して自分の子どものことを強調する、または自慢するのを、推奨しない。(しかし、私たちはもちろん、自分の子どもを褒めることができる)。

また、学校もこのような傾向にある。今のところ、教育課程では、ほとんど競争主義的な性格は見られない。生徒たちは、小学校(最初の7年間)に成績をつけられることはないし、先生は声高に、テストや試験で誰が一番であるのかを言わない。その上、高等教育における試験結果の公開は、匿名で行われている。

伝統的に見て、ノルウェーのアイデンティティは社会階級と、地勢ほど強くは結びついていない。その代わりに、どこで育ったのかが重要になる。ベルゲンに40年間住んでいる人でも、西ノルウェーの小さな町ヴォスで育ったのであれば、ヴォスの出身であると言うだろう。

そのため、ノルウェー人は初対面の人と会うとき、たいてい「どこの出身なのか」を最初に尋ねる。そしてその後、仕事や職場のことを質問するだろう。

というのも、お互いの社会的またはヒエラルキー上での立場には、興味関心が薄いからだ。

それに加えて、物質的なものは、多くの状況下では、理論的なものよりも低い地位に属する。

ノルウェー人が普段、気軽な言い回しやふるまいをすることに、外国人はすぐに気づく。あまりにも気軽なので、他の国の人々には、それが無礼であると解釈されることもあるかもしれない。

私たち自身は通常、敬称や階級を使わない。そのため、他の文化を持つ人々と話すとき、それがどのくらい重要であるのかを忘れてしまうほどだ。

あるとき、私は他国の大使に、ノルウェー人のとあるグループを(英語で)紹介したことがあった。それが社会的な交流であったにもかかわらず、彼は自分の名前の前に敬称をつけず、**Mister**とだけ言った私に対して腹を立てた。彼にとって、職場の肩書きや所属は、アイデンティティの中で大きな位置を占めるものだったのだ。

綺麗に着飾ることは、一緒にいる人に対して、敬意や礼儀正しさを示すことにつながる。外国人の学生は、ノルウェーでの最初のパーティーのとき、ドレス、ネクタイ、素敵なワンピースやハイヒールの靴といった、自分が持っている物の中で、最も華やかな服や装飾品を身につけてくる。

しかし、彼らは、「金持ち」のノルウェー人がとてもシンプルな服装でパーティーに来たことに、最初は驚いていたにもかかわらず、段々とパーティーにノル

ウェー人のような、普段どおりの飾り気の無い服を着てくるようになるのだ。

ファッションは、現在のノルウェーで変わりつつある。しかし、今のところ、大人のノルウェー人女性にとって、集まりの際、目一杯着飾ることは、居心地が悪いことであろう。

ルーマニアから来た学生は「ノルウェーの民話のお姫様でさえ、地味だ。彼女たちは、素敵なワンピースもダイヤモンドも持っていないし、王様は階段の上に立ち、自分の娘がいないのを寂しく思う、人の良い農民である」と評した。

気軽なノルウェーのスタイルは、職場にも関係している。ノルウェーにいるノルウェー人たちは、職場で特別形式にこだわった、きちんとした服装をすることは、それは顧客に会うような場であっても、同じである。

服装が、誰がリーダーで、誰が一般の社員なのかというサインになることは、ほとんどない。校長や銀行の支店長、医長は、会議やテレビインタビューの際、スーツやドレス、ネクタイを身につける必要が無い。

ノルウェーにいる外国人は、上司や身分が上の人、両親、先生に対するノルウェー人の態度に、非常に驚き、そしてショックを受けることもあるだろう。

例えば、電話交換手は責任者に説教することができるし、看護師は病院の医師を叱ることができる。そして娘が自分の父親に抗議し、非難することもあるし、学生や生徒は教授や先生と意見が食い違ってもかまわない。

そのような態度は、非難や他人の視点に向き合わない人は、誰も良い上司や先生にはなれないという、ノルウェー人の考え方から来ている。

普段の、そして公式の場でのあいさつの仕方に、身分を表すサインが見られることは、めったにない。上司と話すときも、牧師と話すときも、従業員や先生と話すときであっても、そのサインを見つけられない（王室の人々や議長が、議会のホールの席に座っている場合を除く）。

現在最も一般的なのは、誰に対してでも、**du**（「あなた」のくだけた言い方）と呼びかけることである。そして相手のことを、ほとんどの場合、名前のみ、または苗字と名前の両方で呼ぶ。

肩書きを使うことは、一般的ではない。様々な権威者に対する、特別な礼儀正しさを表す決まり文句やあいさつは、平等という理想にそぐわないおべっかと思なされるだろう。

上司が職場で自分の部下を抑制し、監視したり、または（軍事制度の枠組みの外で）命令したりすることは、寛大な対応ではない。なぜなら、権威者は独裁的になるべきではないからだ。

上司は、専門職の分野で優秀なだけでは不十分である。良い上司はまた、人の

言葉に耳を傾けることができ、分別があり、もらったアドバイスをしっかりと受けとめ、チームを構成し、争いごとを解決し、社員と上手くコミュニケーションを取って、協力することもできなければならない。

あるドイツ人の工場労働者は、ノルウェーや北欧の働き方について、次のように述べた。「北欧の上司は、労働者を抑圧することなく、彼らに仕事と一そして責任を一委任している。ノルウェーの労働者は自分の仕事、つまり職場の繁栄に繋がることに対して、責任を負う」。

実際にフィールドワークを行なったわけではないが、ノルウェーのように「水平な」社会構造を持つ文化は、明らかな階級制度を持つ「垂直の」文化と比べて、礼儀正しさのコードのバリエーションを、そこまで多く必要としていないのではないかと私は考える。

ノルウェー人の間に、少なくとも表面的には、明確な階級の識別や階級制度は存在しない。私たちは全ての人間が同じであり、同じように扱われ、語られるべきだという考え方を好んでいる。そのため外から来た人は、それらに適応することを難しく感じるかもしれない。

「温かい」文化と「冷たい」文化

外国文化の中において、礼儀正しさのコードに関する知識が足りないことは、誤解を招いたり、不満をおぼえたりする原因になるかもしれない。それどころか、「これは差別的である」と判断するときの基準にすらなりうる。

ノルウェー人は、誰にでも、たいていは *hei, god dag* や *(go)morn*（どちらも「やあ、こんにちは」といった感じ）とあいさつをする。

生徒の中には、特にラテンアメリカやアフリカから来た生徒の中には、ノルウェーのあっさりとしたあいさつの仕方を、不快に思っている人もいる。もし彼らが、ノルウェー人の生徒と共に、楽しい夜を過ごすことがあれば、そのノルウェー人が翌日に、*hei* と短いあいさつだけして通り過ぎていく様子に、落胆するはめになるだろう。

このことを、理解できないと思う人もいる。そしてノルウェー人学生がこのような態度を取るのには、自分が外国人だから、あるいはそのノルウェー人が自分のことを好きではないからだと考えられるかもしれない。

そのため外国人学生は、次のような説明を受ける必要がある。それは、*hei* が **ノルウェー人にとって**、無礼でも冷たいわけでもなく、ただ単に、最も一般的な

ノルウェーのあいさつの仕方—それは一般的な礼儀正しさのサインとされる—である、ということだ。

このような説明を受けなければならないのは、知り合いと会ったときには少しだけおしゃべりをする、といった習慣を持つ文化の国から来ている学生である。この文化が特に、ノルウェーの「冷たい」文化と対照にある、「温かい」文化であると見なされる。

私は何年か前に、アフリカのある国での出張中、このような「温かい」文化のあいさつの儀式を体験した。

地元の人に同行してもらいながら、15から20の家庭を訪れた。色んな家を訪れたとき、その家族の人に戸口で出迎えられ、そしてその度に、数分間の会話が行われた。

それは、だいたい次のようなものである。「元気だった?」「ありがとう、私は元気だよ。君の方は?」「ありがとう、元気だよ。君の奥さんは元気?」「ありがとう、元気だよ。君の奥さんは?」—その他に、君のお母さんは?君の息子さんは?なども尋ねていた。どんなときでも、答えは「ありがとう、元気だよ」であった。たとえそれが、アパートの一室にいる、死にそうな高齢の母親であっても、答えは変わらないのだ。

ノルウェー式のあいさつに馴染みのある私は、これを非常に中身の無い、不必要なものだと感じた。返答は機械的で誠実なものではなく、その全てが、いわゆる無駄な時間であった。

しかし、次のような重要なことを、付け加えなければならない。これは**私にとって**、無駄な時間であったということである。

私の期待するあいさつ—つまり、どのくらいの時間が使われ、どのような言葉で行われるのかといったこと—に基づくと、これは特別な価値を持たなかったのである。

はっきり言うと、彼らのあいさつは私にとって、「温かい」文化に相当するものではなかった。しかし、戸口にいたその二人にとって、これは好意的であり、意味のある、そして親交を深めるための、礼儀正しいあいさつだったのである。

それは、会話を始める一つの方法であった—おそらく私たちノルウェー人は、このような感じで、天気の話をしているのかもしれない。

ここで、次のような疑問が出てくる。私たちは完全に、そして客観的に、「温かい」文化と「冷たい」文化について、話すことができるのだろうか?

ちょっとした言葉一口先だけのフレーズかうぬぼれか、それとも礼儀正しさか？

他の国を訪れるとき、または移り住むとき、私たちは礼儀正しく見えるための、ちょっとした言葉や表現に欠けていることがある。

あるフランス人男性は、食事を始める前に **bon appetit** と言わない人間を、特別育ちのよい人とは考えないかもしれないし、**pardon** と言わずに、他人の前を通り過ぎる人に対しても、同じように考えるかもしれない。**Pardon** という言葉は、たとえ家のリビングであっても、そのことを誇張するために言わなければならない。

そこにはきっと、フランス人のビジネスマンが、北欧のビジネスマネージャーは上品ではないが、物事を効率的に行うと主張する、数多くの理由が存在するのだろう。

アメリカ人は、ノルウェー人が **excuse me** と言わずに、一緒に立ち話をしていいる人々のグループから離れることがあると指摘する。

そしてイギリス人は、ノルウェー人を利己的だと思うかもしれない。というのも、私たちは、「元気？」と問いかけられたとき、たいてい「君も元気にしていた？」と問い返さずに、自分のことを話し続けるからだ。

このような事例は、いくつでも出てくる可能性がある。

「本当の」意味？

ノルウェー人は、礼儀正しい表現を過度に使う習慣がない。そのように指摘する移民は多い。もし、ノルウェー人が何か好意的なことを言ったり、行なったりしたのであれば、それは心からの、正直なものだと考えられるべきである。しかし、それは人の名前が省かれていない場合のことを言う。

ノルウェーのビジネスマンが、その例として挙げられる。ノルウェー人がそのような対応をするのは、たいてい個人的に、少なくともその状況下では個人的に、知らない人に対してである。

英語の場合は、常に **Dear Sir/Madame** で始める。その一方で、ノルウェーのビジネスマンは、**kjære(Dear)** のような言葉を省略する。このやりとりの中で、受け取る側との親密な関係は、何も無いからだ。

私たちはまた、今日人と話すときに、**fru(Madame)**や**herr(Sir)**を使うことはめったにない。もし、それを使った場合、たいてい冗談に映る。

例えば、**Skal fruen ha mer kaffe?** (奥さん、コーヒーのおかわりをいかが?) がある。ノルウェー語での **Madam** は、ぼっちゃりした、年寄りの、少し威圧的な女性を連想させる。

ミスターを意味する **Herren** は、単純に、イエス=キリストや神と同義語となる。

ある典型的な学校のフランス語授業に、こんな冗談話がある。**Je vais aller à Paris pour chercher le Monsieur qui habite là** (私はそこに住むその男性を探すためにパリに行きます) というフランス語の文を、**Jeg skal gå til Paris og søke Herren som bor der.** (私はそこに住むイエス=キリスト (または神) を探すためにパリへ行きます) と、ノルウェー語に訳すというものである。

他の文化と比較すると、ノルウェー人は好意や礼儀正しさを示す特別な言葉をあまり持たない。そのように指摘する移民は多いし、筋が通っているように思う。

しかし、ノルウェー人は全ての文化に存在しているとは限らない、いくつかの表現を持つ。

例えば、食後に席を立つ際には **takk for maten** (ごちそうさま) と言い、その言葉を聞いたホスト役は、**vel bekomme** (おそまつさまでした) と言う。ゲストは家に帰るとき、ホスト役に向かって、**takk for meg,takk for i kveld** (今夜はありがとう) と言い、自分たちと共にいる他のゲストに対して、**takk for laget** (一緒にいてくれてありがとう) と言う。そしてゲストとホスト役が次に会うときには、**takk for sist** (この前はありがとう) と言うだろう。

いくつかの地域では、お年寄りたちが、食事をしている、または働いている誰かに偶然出くわしたときに、**(Gud vel-)signe maten** (食事を楽しんでね) や、**(Gud vel-)signe arbeidet** (仕事頑張ってね) と言う。

そして生徒と先生は、毎日お互いに **takk for i dag** (今日はありがとう) と言い合う (さらにノルウェー語では、他の言語と同じように、過去形を用いたりして、礼儀正しさを表現することもできる。例えば’’ **Kunne jeg få snakke litt med deg?’’** (少しお話しすることは出来ますか) がある)。

ノルウェー人は、このようなノルウェー特有の「感謝の言葉」を言うことを、長い伝統としてきた。

しかし、新しいものに対して、特に真実とかけ離れているように感じたとき、私たちは懐疑的になる。このことを指摘する人は多い。

その中でも特に、アメリカ文化からきた表現の場合、それを不誠実さや世間知らずの境界線上にある、口先だけの表面的なフレーズと呼ぶ。

アメリカ人は、初めて会う人に **Nice to meet you** とあいさつをする。そのとき、ノルウェー人は「ええと」と戸惑いながら、「彼らは私たちのことを全く知らないのに、どうしてそんなことが言えるのだろうか？」と考えるかもしれない。

ノルウェー人は何かを言おうとする度に、そのことについて考えなければ気がすまない。だから、新しい礼儀正しさの表現に慣れるまでに、時間がかかる。

しかし、私たちは変わりつつあり、初めての都市文化に直面しようとしている。今日、店員が客の **takk for hjelpen**（手伝ってくれてありがとう）に対し、**bare hyggelig**（どういたしまして）で答え、最後に **ha en fin dag**（良い一日を）とあいさつするのは、ありふれた風景だ。

この礼儀正しさは、現在急速に村社会にも広がっている。**God helg**（良い週末を）は、長い間受け入れられてきた。しかし、今は村の店の人も、**ha en fin dag** と言い始めている。

こうしたあいさつを嫌がり、不要なうぬぼれと、うわべだけの親密さだと見なす人もいる。「あなたには関係が無いだろう！」とか、「これはただの、私たちのお金が欲しい人の、口先だけのフレーズだ」とさえ考えるかもしれない。

また、私たちは電話のセールスマンが何度も会ったことも無いのに、自分たちのファーストネームや、**Hvordan har du det?**（元気にしていますか？）を使うとき、それがうわべだけの興味であるとか、ただ単に不誠実な感情であると受け止めることもある。

そしてセールスマンの目的は、人々が進んでモノを買いたくなるような、「陽気な」口調を作ることであると解釈する。たいていの場合、それは間逆に働く。

ノルウェー人のほとんどが、このよううわべだけの好意に腹を立て、電話を、がちゃんと切ってしまうだろう。

私たちノルウェー人は、ここ十年で「互いに触れ合う」ことを覚えた。しかし、それにもかかわらず、ただの知り合いに対してハグをしたり、キスをしたりすることは、未だに一般的ではない。そのような行為をするのは、愛する人、または仲の良い人とでなければならない。

どうしてもしなければならないときは、おそらく顔の片方に、軽くするだけで十分だろう。

誰かを紹介されたとき、客として迎え入れてもらったとき、パーティーで素敵な夜をありがとうと感謝するとき握手をすることは、普通である。

最近では、ノルウェーの若者の間で、友人と会った際に握手をすることが流行っているようだ。その説明として、移民とのふれあいや、ノルウェーの若者が数

多くの外国の映画やビデオを見ていることが挙げられる。

ノルウェー人が、unnskyld (すみません) とそこまで頻繁に言わないことは、すでに述べた。

私たちは、宗教的な表現方法が起源である（神様に対して、「私たちの犯した罪をお許してください」といった意味）、om forlatelse や tilgi meg を使うことも可能である。

新教（プロテスタント）では、ご存知のように、善行によってではなく、慈悲や許しによって天国に行く。

千年前にキリスト教が導入されたとき、復讐をする代わりに慈悲を示すという考えを実践することに、ヴァイキングたちは苦勞していただろうと容易に想像がつく。

この宗教の人間観は、人は絶えず間違いを犯し、多くの欠点を持つため、許しを必要とする、という考えを含む。

イスラム教徒のある作家は、あるとき、キリスト教はこの見解を自らの宗教の中に持っているために幸福であると述べた。

そのため、間違いを犯した人々に慈悲や許しを示すことは、キリスト教文化でより受け入れられたのだ、とも彼は主張した。

今日のノルウェーでは、公共機関の職員が謝罪を過剰に求める。教会や首相、大臣、政治家、リーダー、公務員は、自身のことや、過去にノルウェー社会で行なわれた悪事に対して、許しや市民の理解を求める。

ノルウェー人にとって間違いを認めることは、一般的に、アジアの考え方のように面目を失うことを意味しない。上司や大臣は何度も慈悲や許しを求め、それを獲得する。編集責任者やジャーナリストもまた、責任を問われるような、大きな間違いを犯すこともある。

権威者が誤りに陥りがちになるとき、ノルウェー人たちは、彼らをより信頼し、同情しているように見える。なぜなら、私たちは本当のところ、リーダーや政治家が、他の人々よりも道徳的に立派であったり、高潔であったりすることを、あまり期待していないからだ。

「彼らだって、ただの人間なもの」と私たちは言う。

自身の文化的固定観念は、他人と接することで最も容易に知る

ノルウェー人の大多数は、自分たちが特別必要になった場合に、公共機関が様々な方法で、自分たちを助けてくれる準備ができていることを期待する。

これに対し、ノルウェー人は様々な特権を与えられているのに不満が多い、と言う人もいるかもしれない。

それでも彼らがこのような期待をするのは、自分たちがどのような権利を持っているのかを知っているからだ。そしてコミュニエ（自治体）や国が「責任を持つべき」であると常に絶えず考えていることも、その理由として挙げられる。

東欧の都市にある大学のプロジェクトの関係で、ある夕方、夕食を食べるために、学生グループと一緒に外に出かけたことがあった。電気代が高いため、通りは暗かった。街灯や、店の窓の明かりもなかった。

すると突然、ある一人の学生が、通りにあった穴に落ちた。50センチほどの深さの穴は、暗がりの中で、何も注意喚起されていなかった。しばらくしてから、その少女は自力で穴から出てくることができた。しかし、私の怒りは収まらなかった。ノルウェー的な考え方をする私の頭の中には、すぐに「誰が責任者なの？」という疑問が生じた。

私が街道の責任者、コミュニエ（自治体）、国、保険や賠償のことを考えている一方で、ブルガリア人の学生たちは「もちろん、通りを歩いている私たちに責任がある」と答えた。

誤解が生じるのは、ほとんどの場合、言語知識の不足が原因であると言えるだろう。しかし、移民がノルウェーの言葉をとってもよく一つまりノルウェー人以上に一理解するときにも、間違いがおこる可能性がある。

ノルウェーの言語には、多くのドイツ語からの借用語や、直接ドイツ語からノルウェー語に翻訳された言葉がある。このことから、ドイツ人はノルウェー語を早く身につける。ドイツ語が同じ言語族にあるのも、その理由の一つだ。

しかし、ドイツ語からの借用語は、ノルウェー語になることで、意味を変えてしまうこともある。そのような言葉として、文字通り、正午（*midt på dagen*）という意味を持つ、*middag* がある。

この言葉は伝統的な農村社会で、正午に食べる食事を表す語としても使われる。今日、ノルウェーの少女や女性は教育を受け、家の外で仕事をしている。そのため今では、正午に温かい食事と共に、家で夫を待つ人は誰もいない。

その上、現在ほとんどの職場では、昼休みは30分間だけであり、昼食は職場で食べられている。そのため最も一般的なのは、正午ではなく、仕事後の16時から18時の間の夕食の時間に、家族みんなで温かい食事を食べることである。

ノルウェー語を流暢に話す、あるドイツ人の家族は、*middagsmat*（ドイツ語で、*Mittagessen*。ドイツでは、12時から14時の間の食事のこと）にノルウ

エー人夫婦を招待した。彼らは12時から13時の間に、温かい食事の用意を終えた。

しかし、その時間に、ノルウェー人たちは来なかった。彼らは16時になってようやく現れ、「仕事が早く終わったから、ここに来る途中で洗車をしてきたんだ」と満足げに言った。

ドイツ人夫婦は何も言わなかったが、これを無礼の最たるものだと思った。しかし、そのノルウェー人夫婦は当然、16時にやっと食事に来たことを謝らなかった。

多くのノルウェー人は、「ありのままを言う」ことを理想としている。つまり、物事を正しく進めるために、はっきりとした言葉で、自分の考えていることを率直に言うのである。

ノルウェー人の大多数にとって、toalett（トイレ）や do（便所）のことを尋ねるのは、無礼なことではない。

例えば、アメリカ人がトイレのことを考えているのに、それを bathroom（浴室）や restroom（休憩室）と言い換えるとき、彼らはその意味を婉曲にしているのだ、と私たちは思っている。

この言い換えになじみのないノルウェー人がニューヨークに行き、アメリカ人の友人に、空港へ車で迎えに来てもらった。彼は、'Do you want to go to the restroom?（トイレに行きたい？）'と尋ねられた。そして彼は、'No thank you,I can do it in the car（車でできるから結構）'と答えた。

礼儀正しい「いいえ」の言い方とは

ノルウェー人にとって、「いいえ」を表す言葉は、neiのみである。そして nei を使わずに「いいえ」を言う方法を知らない。そのような極端な主張をする世代の人も、当然ながら存在する。

礼儀正しく「いいえ」を言う場合には、たいてい nei,dessvrre を使う。しかし私たちにあって、nei という言葉を使わない礼儀正しい「いいえ」を理解することは、難しいとしか言いようがない。

外国で働くノルウェー人は、母国に帰ってくると、現地の人たちは信頼できないし、約束を守らない、と愚痴をこぼす。

ボディランゲージとは、他の国から来たお客様に対して行なわれる、礼儀正しきや尊敬、思いやりのサインとなる、慣用的な表現である。ノルウェー人にと

って、それは答えをあいまいで、ミステリアスなものにする。

しかし、その答えは「その土地の人」にとって、当然正しいものであり、礼儀正しく、はっきりとしたものである。

私自身、そのような間違っただけの解釈をしたことを、鮮明に覚えている。

1990年代、西アフリカのセネガルで、私は赤十字社のプロジェクトに参加し、建物を建てるための土地を探すことになった。一人のセネガルに同行してもらい、国中を見てまわった。

話はとても長くなるが、ついに私たちは、首都ダカール郊外に土地を所有する一族の情報を得た。その男性と野原で待ち合わせ、建物の設計図を見せながら説明をした。

私たちの言うことに、彼はいちいちうなずいていた。そして最後にほほ笑みながら、セネガルや世界を良くする団体に、土地を売るのは光栄なことですね、とフランス語で言った。さらに、建物が計画通りにでき上がることも願ってくれた。最後に、握手をして別れた。

私は土地が確保できたことに、ほっとした。あと数日後には、国を離れる予定だったからだ。しかし、同行したセネガル人は、自分たちはあの土地を手に入れることができなかったと言った。

私は苛立った。一人の、北から来た女性として、「答えは『はい』なの？『いいえ』なの？」と引き返して尋ねたかった。しかし、そのセネガル人は一貫して、答えは否定的だった、と言いつづけた。結局、また一から土地を探さなければならなかった。

その全てが困惑するものだった。私は、短い会話の一つ一つの言葉を理解していた。しかし、言語は言葉以上の意味を持つ。

私は、口では言い表されていないことを、解読できなかった。それは、声の調子や行間であり、そして目や手、動作、身振りといった、ボディーランゲージである。それに加えて、特定の状況下における、その男性と私たち二人の買い手の間の、礼儀正しさや言葉のやりとりに関係する、暗黙のもの全ても含んでいる。

他の言葉に言い換えると、彼の言葉を理解できたにもかかわらず、外国文化にいる、この礼儀正しい男性の真意を「読みとること」ができなかったのである。

相手ははっきりと口にしないサインを含め、礼儀正しい「いいえ」を解釈することは、外国人が経験する中で、おそらく最も複雑な言語行為と言える。

反対に、彼がどのように私を解釈したのかは、はっきりと分からない。ただ一緒にいてきただけの、コミュニケーションのとれない人間だと思われたのかもしれない。

というのも、突っ立っていようと、無言であろうと、私の存在自体が意味を持っているからだ。

外国人が礼儀正しさを表すための方法として、質問にはっきりとした「いいえ」を含まずに答えた場合、それはノルウェー人が素直に評価できないような礼儀正しさの形となるだろう。

もし、ベトナム人やエジプト人に道を尋ねたら、その人は道を知らなくても、できる限り助けようとするかもしれない。

彼らの文化では、特に外国人に関しては、道案内しようとしなくて無礼であるとされている。なぜなら、その外国人は国のお客様であり、親切に扱われるべきだからだ。このタイプの礼儀正しさは、道を間違える恐れもある。

そのため、ノルウェーに来たばかりの移民が学ぶべき表現は、質問に答えるときや招待されたときに使う、明確な ja(gjerne) (はい) と nei(dessverre) (いいえ) である。

もし、それができなかった場合、不親切と受け止められるか、信頼できないという評価をもらうだろう。

ノルウェーらしい礼儀正しさは、他人にとって、無礼となりうる

ノルウェー人が、はっきりとした答えを期待することは、多くの物事に結びついていると言える。

その例として、**Sunnmøre** (ノルウェー西北部の地域) の人がアジア人を、食事で死に追いやりかけた話をしよう。

私の母は、くじ引きを売りに来る子どもでさえも、必ずコーヒーと食事でもてなす。そんな母が、あるとき、韓国から来た男性を家に招待した。彼はもちろん、夕飯を食べにきた。しかし、それはかなりの量だった。というのも、その食事は、彼を歓迎していることを示すものだったからだ。母は何度も料理の入った皿を送り、彼は毎回それを皿に取って食べていた。

もし、年老いた **Sunnmøre** の専業主婦が、客に目の前の料理を食べよう無理強いし、おかわりするよう求める場面に遭遇した人であれば、この状況を理解するだろう。

通常の数回に加え、もう二、三周してからようやく、一人のノルウェー人が礼儀正しく、はっきりと「もう結構」と言うことができた。そしてついに、その言葉は尊重されたのである。

一方アジアでは、多くの地域で、食事が提供されている限り、食べ続けることが礼儀正しいとされている。しかし、ホスト役は食事中、ゲストの動きに注意を払い、頃合いを見計らって、食事を出すのを止める。

母は、食事を味わってもらえたことに喜んだ。しかし、最後には「かわいそうな人。彼は、とてもお腹がすいていたのね」と思った。客はおそらく、「もう食事を出すのは止めてくれ。これでもう十分だ」と考えていたのだろう。

母は客の方をじっと見て、食後に昼寝をしたいのかを尋ねた。それはまさに、彼が望んでいたことであった。

ノルウェーで、オフィスに入る前にノックをすることは、一般的な礼儀正しさとされている。私は17年間、外国人の生徒たちを教えているが、何人かの生徒が戸を叩きもせず突然、ドアを開けてオフィスに入ってくる状況を何度も経験している。

私たちはこれを最初、無礼で、礼儀作法が欠けていると思うだろう。しかし、それは別の理由を想像することができなかった場合の話である。

多くのアフリカの国々では、強盗だけがドアをノックする。彼らは、誰もいないことを確かめるために、戸を叩く。

そのため聖書が、いくつかのアフリカの言語に翻訳されたとき、イエス=キリストは「私がドアの前に立ち、ノックするのを見よ」と言うことができなかった。そのかわり、「私がドアの前に立ち、叫ぶのを見よ」と言ったのである。

後片付けをすることは、お行儀がよく、子どものしつけには欠かせないと考えられている。

ノルウェーでは一般的に、他の多くの国で行なわれているような、清掃員が夜中に通りや公園を掃除し、きれいにするといったことがない。それに加えて、ノルウェー人は家に使用人をおくことに慣れていないし、職場や学校の食堂ではグラスやコップを、自分たちで持ってくる必要がある。

しかし、私たちのマナーが、常に良い状況を作るとは限らない。あるブルガリアの大学の食堂で、高齢の女性が、グラスとお皿の載った大きなトレイを運んできた。明らかに疲れ切っている様子だった。

そのため私は、ノルウェー的な考え方に基づいて、自分が使ったコップや容器は片付けると主張した。しかし、生徒たちはこう反論した。「もし、あなたがそんなことをしたら、彼女の仕事が無くなってしまう」と。

ノルウェーの賃金水準や社会的平等の考え方は、他の国を訪れたノルウェー人を、知らないうちに無礼にしてしまうこともある。

私たちは、ホテルのポーターや清掃員の給料が非常に低く、客からのチップに頼らざるをえない状況について、考えていない。

ノルウェー人が、自国で馴染みがないことが原因で、あらゆる種類のサービスに対してお金を払わないとき、ケチで無礼だと見なされるだろう。

贈り物や援助を与えたり受け取ったりすることも、文化的な礼儀正しさのコードによるものである。ノルウェー人の大多数は、感謝の気持ちの借りをそのままにすることを嫌がる。

贈り物を頂いたり、助けてもらったりしたときは、できる限り早く、確実に、これに報いる。

ノルウェー人の多くは、お金を借りることを好まない。もし、借りることがあった場合、たとえ20クローネ（約270円 ※2017年1月現在）のような少額であっても、確実に返す。これは、裕福な人に借りた場合でも同じである。

ノルウェー人が誰かに贈り物をするとき、大きいかどうかや、高いかどうかはあまり重要ではない。最も重要なのは、その贈り物が、受け取る側の好みや価値観に合っていることである。

ある中国人の生徒は、あるとき、次のように言った。

「ノルウェー人は贈り物をするとき、それを受け取る相手に何が似合うのかを見つけ出すことに、長い時間をかける。それは色であったり、素材であったり、スタイルであったりする。私は中国に帰るとき、20体ものブーナット（ノルウェーの民族衣装）を着た人形を持っていく。そして、近所の人に同じプレゼントを配る。なぜなら、自分がどのように見なされるのかは、その贈り物にかかっているからだ」。

ノルウェーでは、客がいるときに贈り物を開けないことは、どちらかというところ、無礼であるとされている。そのようなことをすれば、恩知らずで、もらったものをありがたく思っていない、と見なされるかもしれない。

しかし、礼儀正しいアジア人は、贈り物を贈ってくれた人がいるときに、包みを開けたりはしない。なぜなら、お客様は贈り物よりも大切だからだ。

ノルウェー人が贈り物をその場で開け、中身が全員に知れ渡ってしまうようなことがあれば、送り主は居心地の悪い思いをするだろう、と中国人学生は考える。

もし、中国人が小さい、または安い贈り物をすれば、その送り主は恥ずかしく感じるだろう。中国では、貧しいことは恥であり、安い贈り物はそれを指し示すことになる、と彼らは説明する。

移民の中には、ノルウェー人は両手で包みを受け取らないので、無礼だと考え

る人もいる。

あるチュニジアから来た学生は、ノルウェー人は何かをもらったとき、それを大きさに言う、と話す。「彼らは何度も礼を言って、何回もその贈り物が素晴らしいと言った—まるで、私がこのような贈り物をするに、驚いているかのよう！」。

贈り物を受け取らないことは、無礼である。しかし、ノルウェーでは、それが必要な場合もある。

公共機関の職場で、ある一定の価値を超える贈り物を受け取ることは、許されていない。そのような贈り物は、贈り主やその家族に関する判定に、影響を及ぼす可能性がある。

顧客が公務員に何かを贈ることも、普通ではない。なぜなら、全員が給料をもらっているし、良い仕事をして、良いサービスを提供することは、当たり前のことだからだ。

さらに贈り物は、「汚職」と見なされることもある—贈り主が受け取り手に対して、何らかの割り当てを望んでいる、と。

例えばイラン人が、一緒にご飯を食べにきた全員分の食事代を、誰が払うのかについて揉め、殴り合いにまで発展することがある。ノルウェー人は、そのような場面を見ると驚く。普段私たちは、相手が家族や近い親戚の場合を除いて、別々に支払いをする。これは男性と女性、双方に言えることである。

ノルウェー人が、レストランの席で共通の勘定書を受け取った場合、ペンと紙を取りだして、食事代を正確に分ける。しかし、この行動は、ケチではなく、自立を意味する。自立を重んじ、感謝の気持ちの借りは作りたくないと考えているのだ。

もちろん、ノルウェー人はレストランで友人や知り合いに、コーヒーや食事をおごってもらうことが好きだ。しかし、それは前もっておごりであると、はっきりと言われたときに限る。

もし、そのノルウェー人が仕事を持った大人であれば、家族や近い親戚以外の誰かに、たくさんおごられることを、普通は嫌がるだろう。レストランの夕食、劇場やコンサートのチケット、切符などを、誰かが全て賄ってくれたとき、経済的な負担、無礼や重圧を感じるかもしれない。

ノルウェー人は、だいたい同等のものを返す、と主張するだろう。というのも、私たちは「買ってもらった」という感覚や、誰かに何かを借りるという感覚を好まないからだ。

ノルウェー人が他人に自慢せず、目立つことをしないとき、それが一種の礼儀正しさであると考えられているのは、前にも述べた。しかし、私たちが庶民的で小さな存在にすることは、常に意図したとおりに相手に伝わるとは限らない。

日本を訪れたあるノルウェーの大臣が、以前ノルウェー国立ヴォルダカレッジに通っていた日本人学生に、通訳を頼んだ。ある日本の政治家との対談で、そのノルウェーの大臣は「私は教育の大半を、(教会の)日曜学校だけで受けました」と自己紹介した。

その日本人学生は、日曜学校が何を意味しているのかを知っていた。そして大臣が一全くのノルウェー的なやり方で—このことを強調したいのではなく、庶民的であることを示そうとしているのだと理解した。

彼女は、これを日本語に訳さなかった。なぜなら、このような発言は、日本人にとって、信頼や尊敬の念を作り出すものではなかったからだ。

「ノルウェーで問題を起こしたいのであれば、遅刻してきなさい！」と、私は自分の生徒たちに言っている。

ノルウェー人は、会議や他人との約束、授業、そして特に夕食の招待に遅刻してくることを、怠慢で無礼だと思っている(ただし、学生のパーティーでは、約束の時間を過ぎてから来ても全く問題はない)。

上司や政治家、そして王族であっても、約束や予定には時間通りに来る。私たちは、'When in Rome, do as the Romans do (郷に入っては郷に従え)'ということわざを知っている。しかし、礼儀正しさのコードは、基本的には書かれていない規則である。

フランス人の家に夕食に招かれたあるノルウェー人は、ノルウェーの礼儀作法に従い、時間通りに家に着いた。しかし、フランス人にとっての礼儀正しさとは、この場合、約束した時間より20分後に来ることを意味する。

自分たちの習慣と異なる文化圏に住むとき、自らの文化的理想や礼儀正しさのコードは、自分自身を縛り付けるものにもなる。

私の姉は26年間、南欧に住んでいる。彼女は何年もの間、現地の人々の約束や招待の時間を守る気のない態度に怒っている。というのも、客に20時に夕飯を食べに来るように頼んでも、22時になって、ようやく姿を現すからだ。

姉夫婦は、たいてい20時に夕食に招待される。私の姉は、自分たちがその家を訪れたとき、ホスト役がスーパーにいるか、シャワーを浴びているようなことがあったとしても、時間通りに行くのだと主張する。そして毎回、同じように苛立つことになってしまう。

外国人学生や移民の話は、ノルウェー人のふるまいに関する、良い

参考資料となる

外国人学生や移民によって書かれた、エッセイやその他の書き物を読むと、どのような特徴や態度、価値観を、彼らがノルウェー人らしさと考えているのかについて知ることができて興味深い。

これらは、本文中で広範囲に、ノルウェー人の無礼さと礼儀正しさの背景を見たり、説明をしたりするときに役立つだろう。

ノルウェー人が誕生日（名前の日ではない）を祝うことや、クリスマスイブとナショナルデーが、特に重要であることに気づく人は多い。

そして、「彼らがたくさんの電気を使い、高い税金を払い、対話はあらゆる種類の争いを解決するという、不動の信念を持っている」ことにも気がつく。

一般的にノルウェー人は、競争にさほど興味が無い。しかし、自己決定権を失うことや、中央集権化を恐れている。この国の人々は、ノルウェーに住むのに最も良い国だと考えているにもかかわらず、不平ばかり言う。

湖の近くや山の上にセカンドハウスを所有したり、あらゆる地域で新聞が読まれていたり、人の家に上がるときに靴を脱いだり、ジャガイモを食べたり、牛乳やたくさんのコーヒーを飲んだり、朝食にコーンフレークを食べたり、土曜日におかゆを食べたり、歯に気を使ったりすることは、典型的なノルウェーらしさと言える。

ノルウェー人は、休暇で暖かい国に出かけたとき、日光浴をする。彼らは肥満を恐れ「だから、人も犬もジョギングをする」のである。

全ての人々が、個人の私有地や農場であっても、ベリーやキノコを摘んだり、泳いだり、ハイキングしたりすることを許されている。ここでは、車の運転に対する、厳しいアルコール規制がある。しかし、それはパーティーの時の話ではない。

ノルウェー人が宗教について話すことは、めったにない。バスの中で、牧師が聖書を読むこともない（「どうしてノルウェー人は、教会に行かなくても、日曜日に休みがあるのだろうか？」）。

ノルウェーの人々は、冬のスポーツ活動や自然、澄んだ空気を誇りに思っている。「彼らはノーベル平和賞を授与しているので、平和を好むのだ」。

そして多くのお金を、様々な資金調達活動に投資している。

ノルウェー人の女性や男性は、(酔っ払っているとき以外は) 通りで叫んだり、ケンカをしたりすることがない。知らない人と話すことも、めったにない。

あるルーマニア人の学生は、「ここノルウェーで、私は以前よりも上手くやっ
ていける。なぜなら、私もノルウェー人のように、非社会的になったからだ。

(・・・) アジア人やノルウェー人は内気であり、その結果、誰とも全くコンタ
クトを取らなくなってしまう！」とエッセイに書いた。

ビルの建ち並ぶ場所から森や野原へ出かけたとき、ノルウェー人のふるまい
が、すぐに変わることに気づく人もいるだろう。彼らはそこで、出会った人全員
にあいさつをし、全く知らない人と立ち止まっておしゃべりをするこさえあ
る。

ノルウェー人が自然と結びついていることは、ノルウェーに来て日が浅いう
ちに、実感するだろう。

あるイギリス人の学生は、私たちが次のように解釈する。

「ノルウェー人であるナンセンとアムンゼンは、人類で初めて、北極と南極に
到達した。それを成し遂げたのは、『超大国』であるイギリスの人々ではなかつ
た。これらの極地探検家たちは理想であり、手本なのである。そのため、ノルウ
ェー人の女性や男性が、日曜日にハイキングに行かない場合、良心の呵責をおぼ
える。彼らは危険に満ちた山登りに出かける。そして、やっとのことで家にたど
り着いたとき、濡れて、凍えて、空腹であることが望ましいとされている。それ
らが達成されたとき、全てをやりきったとを感じるのだ」。

ベネズエラから来たある学生は、ノルウェー人が「石や草を見つけるためだけ
に、何キロメートルも、山道を登っていく。そして山頂で、たいてい一人になり
たがり、家から持ってきた軽食や飲み物を持ち歩いている」ことに驚いた。

ノルウェーは、北海沿いに長い海岸線を持っているので、天気が変わりやすい。
農民や漁師にとって、温度や降水量、風量は大きな意味を持つ。ノルウェー人は、
外でのアクティビティの予定を立てるとき、どのような天気になるのかを知つ
ておかなければならない。

天気は安心かつ非政治的で、もめ事にならない、全ての人に共通する会話のテ
ーマである。タイから来たある生徒は、ノルウェー人の会話は、たいてい天気
の話から始まることに気づいた。

それは、昨日や去年の同じ時間帯と比べると、今の天気はどうなのか、そして
今夜と明日はどのような天気になるのだろうかといった内容である。

彼女は、次のように続ける。「多くのノルウェー人小説家が、ノルウェーの自
然や天気のことを取り上げる。そしてラジオやテレビの天気予報は、ノルウェー

人にとって、特に重要である。彼らは一日ごとに何度も、今後の天気に関する情報を得る。温度や降水量を日記に書きつける人もいる。タイではずっと良い天気が続くので、そのような話が話題にのぼることはない。しかし、ノルウェーに来てから、**タイ人である私も**、風量や温度について考えるようになった。ある日、私は電話で母に、タイの天気について尋ねた。彼女は、嵐が来るのかもしれない、と思ったのだろう。『あなたは、私が知らないことを知っているの?』と訊いてきた」。

雨の多い天気について、不平を言う移民も多い。その中には「全てのノルウェー人がフード付きのアウタージャケットを所持し、小さい子どもでさえ、傘を持っている」という印象を持つ人もいる。

10度以下の気温のとき、できれば家の中に引きこもっていたいというトルコ人学生がいた。その学生は「ノルウェーの子どもは、雨の中だろうと嵐の中だろうと、外で遊んでいる。ノルウェーの女性と男性は、通りに雪があっても、ジョギングをするし、どんな天気でもハイキングに出かける。妊娠した女性や、80歳を過ぎた女性と男性、そして4歳の子どもでさえ、長いスキー旅に出かけることだってあるのだ!」と書いた。

移民の中には、一日または週の仕事終わりに、同僚と一緒にビールを飲むという伝統を、故郷から持ち込んだ人もいる。ノルウェー人はこれに参加しなかった場合、社交的ではないと見なされるかもしれない。

しかし、その伝統はノルウェー的なものではない。なぜなら仕事の後、女性も男性も、保育園や学童にいる子どもを迎えに行き、コーラスの練習やジム、政党や団体の会議に行く前に、買い物と夕食作りを済ませるのが一般的だからだ。

故郷と比べると、ノルウェーのバスの運転手は、親切で手助けをしてくれて、歩行者に対しても、礼儀正しい。学生の中には、そのように感じている人もいる。ノルウェーのバスの運転手は、横断歩道ではない場所であっても、止まることがある。

ノルウェーの運転手が車のクラクションを鳴らさないことを、素晴らしいと思っている人は多い。

その他に、ノルウェー人が飼い犬を外に出すとき、リードをつけていることが、全く肯定的に捉えられている。

そして犬のフンをビニール袋に入れて、通りや歩道、公園から家に持ち帰っていることも、良い習慣であると見なされている。

外国人学生が特に奇妙だと考える、ノルウェー文化の特徴として、次のような例が挙げられる。

それは、ノルウェー人が明るい夏の時期に、夕飯の食卓でろうそくの明かりをつけること、クリスマスツリーにノルウェーの国旗を飾ること、高い水準の教育を受けているにもかかわらず、方言で喋ること、ポップスを方言や英語で歌うこと、そして自分の木造の家を、あらゆる種類の色にペンキで塗り替えることである。

加えて、屋根の上に草が生えている家が存在することや、郵便ポストやゴミ箱用の小さなケースをわざわざ作る人がいることも、その例に含まれる。

ノルウェーでは、子どもができたとき、給料の全額が支払われる形で、職場から夫の育児休暇が与えられる。大多数の人が、これを最も奇妙な制度の一つであると考えている。そして児童福祉施設が、十分に世話をしない親から子どもを取り上げることができるのも、同じように考えられているだろう。

全ての子どもは、0歳から16歳の間、親の経済状況にかかわらず、同じ額の子ども手当を受け取る。

親も教師も、反抗的な子どもを殴った場合、罰せられる可能性がある。これをおかしいと考える人も、中にはいるかもしれない。

また、男性が自分の妻や娘を殴った場合、刑務所に入れられる可能性があるという話や、ノルウェーの若者は結婚前に、多くの恋人と付き合うという話は、本当かどうかを尋ねてくる人もいる。

男子学生は、自分から誘わなくても、ノルウェーの女の子がダンスに誘ってくれる、といった経験をしている。

中には、多くのノルウェー人が結婚や出産を望んでいないことや、子どもは早くに寝なければならぬこと、そのため夜中のレストランでは、ノルウェー人の子どもを見かけないことを、理解している人もいる。

ノルウェーの男性が、男女問わず握手することや、床を掃除したり、パンを焼いたり、保育園で働いたりすることも、なじみの薄いものであろう。

ノルウェーでは、同性愛者でも牧師になれて、その上女性の監督が存在する。このような事実には、衝撃を受ける人もいるかもしれない。

そしてノルウェーの刑務所の独房が、自分用のパソコンとテレビのついた快適なアパートのように見えることや、首相が他の人と同じように、郵便局の列に並ばなければいけないこと、そして国王が普通に通りを歩くことができ、オーブンカーに乗ることができる状況に、驚かれる場合もある。

ある人はノルウェーの家に驚嘆し、「たくさんの装飾がほどこされ、あらゆる

壁に絵が飾ってあり、まるで美術館のようだ」と言う。

また別の人は、ノルウェーの家族を訪れたいのであれば、まず土曜日の夕方に招待されなければならないことや、キャンプや料理、編み物といった活動が学校の教科であること、そしてノルウェー人がビジネス内での個人的な関係は、汚職だと考えていることに驚く。

中には、ノルウェーの教会付属の墓地や病院周辺の庭を、「死者や病人のための公園というよりも、恋人のための公園のようだ」と考える人もいる。

年老いた両親や親戚が高齢者施設に住んでいることや、家族内の結束がほとんど見られないこと、ノルウェーの若者が政治に興味を示さないことは、特に否定的に捉えられている。

犯罪者が守られていることや、政治家たちが世間知らずであること、メディアや人々の間で、セックスについて話されすぎていることに関して、はっきりとした意見を持つ人は少なくない。

また、ノルウェー人は道徳的になることをとても恐れるので、人に助言ができない、英語を話すのが上手だと言われたときに、恥ずかしそうにしている、そして普段の職場では、相応しくない格好をしていることが多い、と思っている人もいる。

ノルウェー社会は非常に規則的で、禁止事項が多く、全てがすばやく行なわれ、効率的で有用である。そのように考える人は、多数存在する。

それに加えて、ノルウェーの夏が過大評価されているのはなぜだろうか！

私たちは時々、ノルウェー人が当たり前だと思っている環境に対して、肯定的な反応をもらうことに驚く。

例えば、ノルウェー人は、たったひとつの仕事で生計を立てられるし、シングルマザーや離婚した人でも尊重され、大臣にもなれる。

そして政治家や監督、その他の権威者を、迫害されることなく批判できるし、障害者は教育を受けることもできる。

さらに、勉強したい人全員が学生ローンを受け取り、教師はただ間違いを探すのではなく、学校での取り組みの中で、良いところを重点的に見る。

ある人は、政治家としてのキャリアよりも、家族と一緒にいることを優先した議会の男性政治家に対して感銘を受け、驚いたと話した。

ノルウェーの家族生活や、性別役割に関して言うと、特に女性の立場が引き合いに出される。

例えば、少女や女性は中絶するのかどうかを自分で決められるし、妻は他の人がいるときに、夫の意見に反発することができる。そして、「妻はソファーの上

に座り、夫に料理やコーヒーを運んでもらうことができる」のである。

離婚することは、男性と同じように、女性にも認められている。そして女性は、子どもや親密な間柄の人に対して、男性と同じ権利を持っている。

ノルウェーの兄弟が、自分の姉妹に関する決定権を持たないことや、彼女たちを殴る権利がないことは、ごく当然のことだ。

また、ノルウェーの少年少女が、自立していることも当たり前とされ（15歳で団体のメンバーになったり、自分の進路や宗教を決めたりすることができる）、誰かのうわさになることもなく、良い友だちになれる。

ノルウェーで、大学にシングルマザーや妊娠中の女性がいる光景は、よく見られる。しかし、何人かの外国人の学生にとって、それは当たり前のことではない。

そして、「シングルマザーが王子と結婚して、王妃になれるのはノルウェーだけ」なのである。

「おそらく、ノルウェーの男性は、他の国の男性とは違ったタイプのユーモアを持っている」と、レバノンから来たある学生は書いた。

彼はこのように続けた。「友人が、ベルゲンの公園のベンチに座っていた。彼の隣には酔っ払った男がいて、ビールを飲んでいて、彼らの向かい側に、一組の夫婦が来た。その酔っ払った男は、自分の持っていたビール瓶で女性の方を指し、『俺はあんたの女房が好きだよ！』と言った。夫はにっこり笑って、『私もです』と返した」。

ある別の生徒は、2004年の新聞に載っていた、ある記事を読んでショックを受けた。

それは、「ノルウェーのレストランで、ある客が、近くを通り過ぎようとしたウエイトレスの尻を叩いた。この男は罰金として、彼女に6000クローネ（約8万円 ※2017年1月現在）を支払わなければならなかった！」という内容だった。

親子関係についても、気づかされるものがある。

例えば、ノルウェーの子どもは、自分たちが望むこと全てを親に話すことができる。そして親は子どもたちに、身体や病気、性、死について話をする。

「ノルウェーの親は、自分の子どもが同性愛者であったり、結婚せずに子どもを授かったりしても、愛し続け、助ける。たとえ、子どもが犯罪者や麻薬中毒患者であっても、同じように接する」。

あるアジア人学生が述べたように、国が「自国民に対して礼儀正しい」ことは、

ノルウェー市民にとって、至極当然のことである。

彼女は特に、ナショナルデーが武力を示さずに祝われることや、ノルウェーのように、麻薬中毒患者を助けようとしたり、家庭内暴力を何とかしようとしたり、子どもや女性に対する性的虐待を罰したりしようとするのは、当たり前のことではないと考えていた。

「ノルウェー文化の最も良いところの一つは、恥や罪を背負うのはレイプした男性であり、少女やその家族ではないということである」。

さらに彼女は、国と民間企業が、働いている人に対して、毎年5週間の休暇を与えていることは、寛大であるとも思っていた（60歳以上の場合6週間）。

あるレバノン人は、ヘリコプターが彼の友人を山から病院に運んでくれたことや、病院が名前や国籍、保険の有無を訊かずに、友人の足首を治療してくれたことは、公的機関からの良いサービスであると感じたという。

中には、精神病の治療に関することや、自殺を試みた人が刑務所に入れられずにケアや助けを得ることといった、この国の専門的で人道的な理解を指摘する人もいる。

ノルウェー人の無礼さについて、直接問いかけると、特に外国人は、最初とても曖昧な言い方をする。

全員が全員、このことに対する自分たちの意見を、進んで知らせようとするわけではない。なぜなら、その問いに答えることは、無礼であることを意味するかもしれないからだ！

しかし次第に、次のようなことを話してくれるようになった。

つまようじをレストランで使うことは、多くの人にとって、奇妙で無礼なことであるとか、ノルウェー人の大多数は、お互いの外見について褒めたりしないとか、彼らは誰かと話しているときに、ポケットに手を入れたまま立っていることがあるとか、ノルウェーのウェイターは、机の上に料理の皿を放り投げるとか、この国の標識が無礼であるとか（'Adgang forbudt!'「立ち入り禁止！」）、ノルウェー人は、他の国で客（観光客）としているときに、ジョギングウェアで歩き回っているとか、そういった話である。

そして、「ノルウェー人から10クローネ（約135円 ※2017年1月現在）やろうそく立てを借りたとき、金持ちで、いくつものろうそく立てを持っている彼らが、それを返してもらいたがるのはおかしい」と言う人もいた。

ある人は、食卓でのマナーに関する、「ノルウェー人の腕」の話をした。多くの文化圏では、隣に座る人に、塩を取ってほしいと頼む。「しかし、ノルウェー人は、断りもせず、自分で塩を取るために、隣の人のお食事の上に腕を伸ばすのだ」。

ノルウェーの文化的特徴やふるまいは、色々な角度から評価される

当然ながら、同じ町から来た、または同じ家族内の2人であっても、ふるまいや文化的特徴に対しての評価が分かれることもある。

というのも、個人の価値観や優先順位は、特定の文化的基準や理想と同じように、自分たちの考え方の中にある表現によって作られるからだ。

例えば、同じ国から来た学生の間でも、ノルウェーの刑罰に対して、まったく意見が合わないことがある。

「ノーベル平和賞を授与する国が、死刑制度を持たないのは当たり前のこと」と考える人もいるし、またある人は、死刑制度は必要な場合もあるし、「最高刑が懲役21年であるというのは、軽すぎる。ノルウェーの受刑者のほとんどが、刑期の3分の2しか務めていない状況を考えて、なおさらのことだ」と考える。

ノルウェーでは、その人が15歳以下の場合、懲役を言い渡すことはできない。しかし、懲役は、全ての年齢層に対する防止策のように見える、と思っている学生も少なくない。

また、尊厳死ほう助は「ノルウェーのような自由の国では」合法にすべきだと考える人もいる。

何が信用や権限を与え、何が名誉なことだと見なされるのかは、文化が決める。

以前にも述べたが、ノルウェーでは、間違いを認めることは受け入れられ、共感や信頼を得ることさえある。これは政治家やリーダーにも、他の人たちと同じように認められている。

しかし、「水平である」ことは、他の文化圏で、異なる評価をされる場合がある。

例えば、ある日本人学生は、「ノルウェー人権威者の間違いを認める発言は、日本人にとって、なじみがないものである」と書いた。

さらに、あるソマリア人の学生は、「私たちの国で、間違いを認めることは通用しない。なぜなら、それは屈辱的であるからだ。人は間違いを否定している限り、自分の名誉を保っていられる」と書き、自分の文化を基準にして、物事を見ている。

ノルウェー人は静かである、と指摘する外国人は多い。私たちが知り合いを見

かけたとき、銀行や店、バスの中で叫ぶことはない。

乗客の中に知り合いがいても、不必要に話しかけないし、約束なしで家を訪れることもない。

この沈黙と内気な性格は、どのように解釈されるのだろうか？無関心？それとも思いやりがある？

その場で立ち止まり、しばらくの間、家族や色んな話題について、あれこれとおしゃべりをする。これが、多くの移民にとっての好意的なあいさつ方法である。

しかし、ロシアから来たある学生の考えは違っていた。

「ノルウェー人がほほ笑んで、hei とだけあいさつをするとき、それは心地よく感じる。私はこの地で、プライバシーを得ることができた。故郷の人が誰かを捕まえて、興味津々にあれこれ詮索するのを良く思わない。彼らは、自分たちが知らないことを勝手に推測し、うわさの種を探すのである」。

エチオピアから来たある学生は、故郷の人たちは彼らの伝統的な、長々としたあいさつの儀式を止めるべきだと考えている。

休暇で家に帰ったとき、彼はその場からほとんど抜け出せなかった。なぜなら、親戚や知り合いが彼と話したが、コーヒーを飲みたがったからだ。会話は午前中いっぱい続いた。

彼は、故郷の人たちがより効率的にならなければ、国は全く発展しないのではないかと恐れた。

モロッコから来たある移民の家族は、少し前に、南ノルウェーのクリスチャンサン (Kristiansand) の住宅に引っ越してきた。そして彼らは近隣の住民が歓迎を示す、ちょっとした食事かささやかな贈り物を持って来てくれることを期待した。

しかし、それは起こらなかった。特にその家族の妻は、このことを悲しくて、無礼なことだと思った。歓迎されていないと感じたのである。

しかし、同じような期待をした別の移民は「引越しで忙しくて、いたるところに箱や袋が散らばっているときに、近隣の人が食べ物を持って来たり、おしゃべりに来たりしなくて良かった」というように、この状況を肯定的に捉えるかもしれない。

移民の中には、ノルウェー人が普段静かであることを、心地よいと感じる人もいる。しかし、彼らを冷淡すぎると感じる人もいるだろう。

あるアメリカ人の学生は、西ノルウェーに行く途中の、狭くてカーブの多い道を走るバスに乗っていた。右側はフィヨルドのある、断崖絶壁であった。

バスは、カーブを曲がってから止まった。そのアメリカ人の学生は、個人の車

の片方の車輪が道の外に突き出てしまい、水につかりそうになっている様子を見て、ショックを受けた。彼は飛び上がった。そして何かできる限りのことをしようと、バスの外へ飛び出したい気持ちであった。

その一方で、ノルウェー人の乗客たちは席にじっと座り、何故バスが止まったのかを知るため、身を乗り出した。そして座ったまま、再びバスが動き出すのを待っていた。

ノルウェーの子どもや若者が、バスの中でお年寄りに席を譲らないことを否定的に捉える人もいる。

良いしつけは、彼らにその行動を求める。しかし、その若い人たちはおそらく、年をとったノルウェー人に、これを断られた経験があるのだろう。

その理由は、彼らが弱く、年老いていると見られたくないからかもしれない。実際に、ノルウェーの老人は、非常に健康な身体を持っている。

ノルウェーの子どもや若者が、大人といるときに、礼儀正しくいようと努力することはめったにない。私たちは、これが無礼なことかどうかを話し合うことができる。

しかし、ノルウェー人の中には、尊敬と恐怖は一緒にするべきではないと言う人もいるだろう。子どもの大多数が、不公平さや尊重されていないことを感じたら、大人に反論するようにしつけられている。おそらく、これは度を越えている、と言う人もいるかもしれない。

多くの文化圏では、高齢者に対して敬意を表すことが、当たり前のこととされている。同じような意見を持つノルウェー人もいるが、皆というわけではない。

高齢者は尊敬に値するときだけに、尊敬されると言う人もいる。なぜなら、高齢者の中には、機嫌が悪くて否定的で、非難ばかりして偏見を持っていて、いつも若者に対して不平を言っている人もいるからだ。どうしてそんな人たちに、敬意を表さなければならないのだろうか？

さらに、敬意は、高齢者と若者の両方に表されるべきであり、高齢者もまた、子どもや若者に対して敬意を表し、礼儀正しくあるべきである。

外国人学生の中には、ノルウェーの学生アパートで、自分の部屋が持てるのは、もちろん嬉しいことだと考える人もいる。その一方で、部屋に一人で住むのは、寂しくて孤独だと思ってしまう学生もいるかもしれない。

ノルウェー人にとって、赤ん坊が生後たった数週間で自分の部屋を与えられることや、若者が早くから自分のお金を管理し、自分の人生を決めることは、普通のことである。移民の中には、それを無責任だと感じる人もいる。

また、ノルウェーの親が子どもの学費を支払わなかったり、彼らをまだ18歳から20歳の間に、アパートに移り住ませたりするのは、おかしいと考える人も存在する。そして、若者が空いている時間に何をするのか、誰と付き合うのかについて親から干渉されない状況を、変だと思う人もいる。

その説明に、1998年の *samfunnsspeilet* (ノルウェー中央統計局から出されている定期刊行物) の中に記された、ある調査結果が使えるだろう。そこには、1127人の親たちが、子どものしつけで何に重きを置いているのかが示されている。

92パーセントの人が、最も重要なことは、子どもに責任感を学ばせることだと答え、88パーセントの人が、自立することが最も重要だと答えた(一方で、子どもが勤勉であることに重きを置くと答えた人は、11パーセントだけだった)。この調査結果は、おそらく今日でも、同じような結果となるだろう。

この国で子どもを授かった移民の家族は、ノルウェーの隣人や友人が、おさがりのおもちゃをくれるといった経験をしているかもしれない。

これを礼儀正しく、思いやりのある行為だと思う人もいるだろうし、侮辱を受けたと思う人もいるだろう。というのも、彼らは貧しく哀れな存在であるとノルウェー人に思われることを危惧するからだ。

しかし、それらの小さい子ども服は、使い古されているわけではない。そのためノルウェー人は、彼らの役に立つならばいいじゃないかと思っているだけだったりする。

子どもを授かった家族に、このような服をあげることは全く普通である。そして、ノルウェー人がフリーマーケットや救世軍の **Fretex** といった安価な店で、中古のモノを買うのもまた、一般的なことと言える。

ノルウェーの若者に対する見方は、バラエティーに富んでいる。

あるラトビア人の学生は、「典型的なノルウェー人の女の子は、ほとんど化粧をしない、日焼けをするために日光浴をしたがる、しっかりした靴をはいて、リュックサックを背負って歩く」ことに気がついた。これを、女性らしさが足りないと考える人もいるし、スポーティだと言う人もいる。

「若いノルウェー人の女の子が、かなりの薄着でビールを飲み、真夜中に一人で家まで帰る」ことは、自由であるとも、道徳に反しているとも解釈される。

東方の国出身の多くの若い女の子は、ノルウェーの男の子は自分たちをじっと見つめたり、口笛を吹いたりしないので、礼儀正しいと言う。

しかし中には、ノルウェーの男の子は女の子に対して、配慮や興味をほとんど示さないの、無礼だと考える女の子もいる。

ラテンアメリカの国から来たある女の子は、次のように比較する。

「私の故郷では、男の子たちが『君の唇は美しい』とか『とてもきれいな髪をしているね』といった、甘い言葉を言ってくれるのに、私のノルウェー人の恋人は、私がやったことの中で、彼が良いと思ったことにしか、言葉をかけてくれない。例えば、私が不愉快で危険に満ちた、急斜面の高い山からスキーで滑ってきたときに、彼は『上手くできたね!』とサラッと言うだけなのよ!」

大多数のノルウェー人と同じように、外国人たちはどんな天気であっても、外に立ってタバコを吸うことを好まない。

しかし、特にアジア人は、公共施設の禁煙について熱弁をふるう。あるインドネシア人は、このテーマでエッセイを書いた。

「喫煙に対する法律を導入した大臣に、私はキスをしたいくらいだ!」とそこには書かれていた。

またノルウェーでは、若者がタバコやビールを買うとき、18歳以上であるということを証明しなければならない。そのことに驚く人もいる。(専売公社で、ワインや蒸留酒を買うことのできる年齢は、それぞれ18歳と20歳である)。

当然ながら、移民の中でも、自分の持つ文化から何を期待しているのかによって、ノルウェーのふるまいに対する意見が分かれる。

仕事中のノルウェー人は、めったに笑わないと指摘する人もいるし、逆にノルウェー人は仕事で、よく笑うと書く人もいる。

あるイラク人の学生は、ノルウェーで、生まれて初めて警官が笑っているところを目撃した、とエッセイに書いた。

中には、ノルウェーの講師は冗談ばかり言っている、彼らは権威者らしく真面目であるべきだ、と考える外国人学生もいる。

しかし反対に、講師やビジネスマネージャーがユーモアを持ち、職場を和ませることができ、間違いを認めることもできるような環境は、解放された気分にしてくれると思う人もいる。

何人かの移民にとって、妊娠中の女性が仕事に行き、以前と同じ活動をするのは、全く間違ったことである。また、出産後にベッドに横たわらないことや、子どもを授かったとき、家にお手伝いの人を雇わないことも、同じように見なされる。

インドから来たある学生は、「ノルウェーの女性は強すぎる。彼女らは妊娠中にスポーツをして、ボートを漕ぐことさえしてしまう」と書いた。

どのような関係を友情と呼ぶのかは、おそらく文化によって異なる。ノルウェー人は、移民がノルウェーで友だち作りに苦労する話を、よく耳にするだろう。

しかし、あるアメリカ人は、とある文章で、一度ノルウェー人の友だちを作れば、その友情は死ぬまで続くだろう、と書き記した。さらに、彼らは約束事をちゃんと守ってくれる、とも述べた。

後ろから来る人のために、ドアを押さえておこうとするノルウェー人は、あまりいない。

あるドイツ人の学生は、次のような好意的な説明をしてくれた。

「ノルウェーで外に出るとき、不必要にドアを押さえたままでいる人は少ない。なぜなら、次に人が来るのに、5分かかることもあるからだ」

ノルウェー人は、話している最中に口を挟まれると苛立つ。そのことに気づいている移民も、中にはいるかもしれない。ノルウェー人は一般的に、話す相手が近すぎることも好まない。

しかし、会話をしている間、彼らはアイコンタクトを取るだろう。アイコンタクトは正直で、誠実であると見なされる。

ノルウェー人は人種差別的で、相手を見下すような態度をとる、と断言する人もいる。

一方、ノルウェー人は他の文化や人種について話すとき、あまりにも礼儀正しく、あまりにも注意深いと考える人もいる。そしてあまりにも「礼儀正しい」ので、彼らがどのような意見を持っているのかを、理解しにくいとも考える。

他のやりとりの中では、ノルウェー人は、はっきりとしていて、直接的だと言えるかもしれない。「ノルウェーの女性も男性も、話し合いのときにお互いの意見が合わなかったとしても、不仲にはならない」。

ノルウェーの医者はたいてい、深刻な病気の診断のときでも、そのことを率直に話す。彼らは患者に何も隠さない。移民たちがこれを残酷だと思ふこともあるだろう。

「正しい」方法で、無礼であることは難しい

何が礼儀正しいのか、何が無礼であるのかは、相対的なものであり、それは同じ民族の文化の中や、同じ都市や村の中でも言えることである。

一般的に見て、罵ることは受け入れ難く、無礼なことである。そして実際に外国文化の中で、他の言語で、汚い言葉を正しく使うのは難しい（さらに、それらの表現は、宗教ごとに異なる可能性もある）。

Dette var jævlig godt (これ、めっちゃいいね) という表現は、家族の夕食会では無礼であり、相応しくないだろう。しかし、若者同士のおしゃべりでは、それはごくありきたりのものだ。

その他のコミュニケーションの中で、ここで問いかけることは、話している相手とはどのような関係なのか、何について話をしているのか、そして発言にはどのような文脈が含まれていたのかである。

私たちは時折、不快や苛立ち、怒り、欲求不満を表現する必要がある。何を言おうと相手が怒るのか、何が最も打ちのめすものなのかは、文化によって違い、また、個人によって違うとも言える。

汚い言葉を母語から他の言語に翻訳するとき、正しく訳されることはめったにない。例えば、英語の *bastard* (私生児) という罵りの言葉は、ノルウェー人を侮辱する際に間違えて伝わる。

ノルウェー語で *bastard* という言葉は、2つの異なる種の両親から生まれた、犬を表す言葉として使われている (ノルウェー語には、類似の表現に *drittsekk* という言葉がある。それは昔、馬が通りを歩くときに、しっぽの下につけていた袋のことである)。

全くノルウェーらしくない無礼のあり方が、都市伝説として、ヴォルダの外国人学生の中に伝わっている。

それは次のような話である。遠くの国から来たある学生は、ノルウェーで運転免許を取ろうとしたが、実地試験に落ちてしまった。

怒り、落胆した彼は、自分が十分に運転できていないと結論付けた試験官を、なじって傷つけようとした。

だからその男性は、自分の持つ文化の中で彼が考えつく限り、最も醜いことをその試験官に言ったのだ。「お前の姉妹とセックスしてやったぞ！」と。

その試験官は驚き、「えっ、彼女のことを知っているのか？」と静かに言った。

「無礼な外国人」

言語と自然、この2つの分野に関して、ノルウェー人は敏感である。

全てのノルウェー人が方言で話し、それらの方言に優劣などなく、一般的に見て、ノルウェー人が自分の方言を誇りに思っていることを理解するまで、外国人は「方言ではなく、標準語を学びたい」と言うかもしれない。方言はアイデンテ

ィティに結びついており、その人が国のどこから来たのかを示すものだ、とノルウェー人は考えている。

他の地域や都市に引っ越したとき、自分の方言を変える行為は、多くの地域で恥ずかしいことだと考えられている。

そして高い教育を受けている人であればあるほど、自分の方言を維持する傾向にある。それはテレビで喋るときや、大学で講義をするとき、政治家としてスピーチを行なうときであっても同じである。歌手の中には、方言で歌ったり、ラップをしたりする人もいる。

私たちは誰かに、自らの方言を見下されることを嫌がる。しかし他方で、相手が自分たちの言ったことを理解しなくても、気にしない。そして結果的に、何回も繰り返し言わなければならなかったり、違う言い回しを使わなければならなかったりしても、かまわないと思っている。

私も、方言に対して同じ見解を持つ。そのせいで、パリのフォーマルな夕食の場で、非常に無礼なことをしてしまった（それはもう、随分と昔の話だが）。

そこでの会話は、始めに誰かが参加者の一人と喋り、他の15人は礼儀正しく聴いている、といった形で行なわれた。

私は隣の高学歴の男性に向かい、善意で、「まあ、あなたはマルセイユから来たのね。あなたの方言を聞き取ることができなかったのよ」と言った。

礼儀正しいフランス人女性が、机の上のきれいな花について話すまで、部屋はしんと静まり返っていた。

「ノルウェーについてどう思う？」というのは、外国人全員が受ける典型的な質問である。そして、それを問いかけたノルウェー人は、ノルウェーの自然について、何か良い話を聞けるだろうと期待する。その「正しい」答えが聞けなかったとき、私たちは驚き、落胆するだろう。

ノルウェー人にとって、山やフィヨルド、滝をありがたく思わない人が存在することは、想像しにくい。しかし、それはもちろん、何と比較するのか、そしてどんな観点を持つのかによる。

平坦なラトビアから来たある学生は、ノルウェー国立ヴォルダカレッジの窓を開けて、**Sunnmøre** の山脈が目に飛び込んできたとき、「ここでは、何も見ることができないのね。どこを見ても山しかないじゃない！」と叫んだ。

ある中国人の学生は、人も家も見つからないような道を歩くのは、恐ろしいことだと思っていた。そしてエッセイの中で、「ノルウェー人は悲しくなったときに山に行く」という、ノルウェー人のハイキングに関する自分の解釈を書いた。

他の国から来たある客は、素晴らしい風景の高原に連れて行かれた。そこは見

渡すかぎり、雪で覆われた山々に囲まれていた。彼女は「何故、私たちはこんなところにいるの？」と叫んだ。

「ノルウェー人は、足にスキー板をはいて生まれてきた」ということわざは、かなり大げさな表現を使っているように思う。全員がスキーに行きたい、またはスキーができるというわけではない。

しかし、ほとんどのノルウェー人は、自然とのかかわりがあるだろう。ロイヤルファミリーは三世代にわたって、海へ山へと、自然を頻繁に利用している。特に女王は、荒涼とした山に、何日間にもわたるような旅へと出かける。

何年か前に、国王夫妻が銀婚式をお祝いしたとき、外国からの王室の人々を、西ノルウェーの狭いフィヨルドにある、急斜面で道のない農場に連れて行ったこともあった。

ノルウェーの都市は小さいが、それでも都市の外に住むことを選ぶ人は多い。仕事が見つけれられる限り、ノルウェー人は高学歴であっても、村や田舎に住むことを望むだろう。

十分な広さや都市より良質な家、そして子どもにとって安全で、自然へのアクセスが良好なことは、特にファミリー層の心をつかむ。

高等教育を受けることも、全く可能である。なぜなら、20を超えるユニヴァーシティカレッジ（高等教育機関）が、大都市の郊外に置かれているからだ。

ノルウェーでは、他のいくつかの国々と比べて、都市と田舎の生活水準やライフスタイル、ふるまいの違いが非常に小さい。

移民の中には、ノルウェーの都市よりも、ノルウェーの村社会を好きになる人がいると考えられる。なぜなら、多くの人を探し求める伝統のいくつかは、程度の差こそあれ、村に未だ存在しているからだ。

人々はたいてい、近隣の人たちと知り合いになり、時折自ら進んで、近隣住民や友人の元を訪れる。

特に高齢の村人は、知らない人との接触をはかる。そして名前や出身地、両親や祖父母はどんな人なのかを知りたがる。それが村の若者にとって、苛立ちの元となることは、少なくない。

全ての移民が、ノルウェーの色々な場所を訪れたことがあるわけではない。しかし時々、彼らの書いたものを見たり、話す内容を聞いたりしていると、都市の外の環境に対して、見下すような意見を持っている印象を受ける。

それは農民や村の人々は無知で、時代遅れで、保守的だという意見である。

もし、ノルウェー人と友だちになりたいのであれば、彼らの方言が変だとか、

「ここって人が住めるの？ここには誰もいないし、何も起こらないじゃない」というようなことを口に出すべきではないだろう。

前述したように、ノルウェー人がバスや電車の中で、知らない乗客に自ら進んで話しかけないとき、彼らを閉ざされた、無関心な人間だと思ふ移民や観光客は多い。

ノルウェー人の側からすると、移民や観光客は人を自由にさせない、非常に無礼な人たちのように見えるかもしれない。

一日の仕事の後、人々はたいてい疲れているし、バスの中はリラックスできる場所である。そして「知らない人や今後会うことのない人と、表面的なおしゃべりをすることが、本当に礼儀正しくて好意的なのか？」と問いかけるノルウェー人もいるだろう。

しかし、ノルウェー人自身が他の国で観光客であるとき、バスや電車の中で、大体は「おしゃべり」の形で、その土地の人とふれあうことを望んでいる。

バスや店の中で、移民たちがほぼお互いに叫び合うかのような大きな声で話すとき、ノルウェー人は苛立つことがある。

一方で、移民たちが「静かな人々」であるノルウェー人について話すとき、それはたいてい、否定的な意味を含んでいる。

あるテレビインタビューで、一人の移民が「ノルウェー人は仕事でもプライベートでも、他人と意見が合わないことをたやすく口にする。でも、怒りは示さない。彼らがいつも静かである様子は、見ていて面白くない。一度でもいいから、ノルウェー人が道で互いに殴りあい、醜い言葉の応酬をしているところを見たい」と言った。

ノルウェー人観光客は、他の国を訪れたときに、うんざりするような出来事を経験する。それは通りや市場、店にいる売り手が、モノやお土産を売るために、執拗につきまってくることである。

売り手は、人のあとをついてくることもある。そして品物を見せたのに何も売れなかった場合、侮辱を受ける。これは、ノルウェーとは異なる。

この国に来た移民や観光客は、店員が迅速な対応をせず、お客様に品物を見てまわらせているとき、店員はやる気がなく、サービスも良くないと思うだろう。

このような対応の理由として、ノルウェー人の大多数が静かに品物を見て、選ぶことを好む、という実情がある。そして私たちは、商品を買うかどうかにかかわらず、店員が様々な選択肢を快く見せてくれることを期待する。

他の国に移り住むとき、その国のコードを知らないことで、無礼だと解釈される場合もあるだろう。

移民の中にはこの国で、故郷での伝統だからといって、市場や店でモノを値切る人がいる。価格は一定のものなので、この行為は無礼と見なされる。

現在のノルウェーでは、フリーマーケットを除いて、値切るという伝統は全くない。しかし、値切ることは昔、特に馬を買うときには、普通であった。

もし、今日誰かが店で値切りを行なった場合、どうなるか。自分たちは必要以上に高い金額で、客にモノを買わせていると疑われているのではないか、とノルウェーの店員は感じるだろう。

17年間、77カ国から来た外国人学生と密な協力を行なってきた、印象に残っていることがある。それは、否定的な内容を知らせなければならないとき、めったに返事をくれないことだ。これは、苛立ちの原因になりうる。

礼儀正しいノルウェー人は、招待や会議に時間通りに行けない場合や、何かを期限内に送り届けることができない場合に連絡をする。

ある国や文化では、人々が食べ物を指でつまんで食べる。その一方で、ノルウェーにいる私たちのように、ナイフとフォークを使って、食べ物を食べる国や文化もある。

食べ物を指でつまむという行為は、無礼で、非衛生的で、食欲が失せると見なされる。子どもたちは、自分たちが選んだチョコレートやクッキーだけを、手で取るようにしつけられている。乾いた食べ物のみ、指でつまんで食べることが可能だ。そのため、ノルウェー人は共通の皿からの料理を、指でつまむことはしない。

自分が食べ切れるよりも多い量の食べ物を、自分の皿に取ることも、ノルウェーでは無礼だと見なされる。皿の上に食べ物を残した場合、ノルウェー人の客は、急にお腹がいっぱいになってしまったのだと弁明する。

このように言わないと、ホスト役は、自分たちの出した食事が気に入らなかったのだ、と思うかもしれない。さらに、多くのノルウェー人は食べ物を捨てることを嫌う。

ノルウェーで、ボランティアは長い伝統となっている。

住宅協同組合や保育園、学校、ほとんどの子どもが参加しているスポーツチームのボランティアに移民たちが参加しない場合、無礼で、非協力的で、連帯意識が薄いと見なされることもある。

「私は保育園に、子どものお金をお金を払っている。なのに、なぜそこに行っ

て、何かしなきゃならないの？」と移民たちは言うかもしれない。

ボランティアは無償で働くという意味であり、例えばペンキ塗りをしたり、掃除をしたり、植物の世話をしたり、何かを修理したりすることを指す。

その目的としては第一に、周辺環境をより心地よく、きれいにするということが挙げられる。しかし、他の家族と一体感を持つこともまた、目的の一つである。ワッフルと楽しいおしゃべりの休憩は、ボランティアを行なうことで得られる。

善意に解釈するということ

一般的に見て、全ての文化や環境は、自分たちが必要とする礼儀正しきの形を持っていると言えるだろう。

当然ながら、私たちはコミュニケーションの取り方が人それぞれ違うために、たとえ同じ文化の中であっても、誤解が生じるのだということを知っている。

しかし、それでもなお「他人」である外国人と共に生きているので、お互いに正しく理解し、理解されることに関する、最も大きな困難に直面している。私たちはそのことも、もちろん分かっている。

ノルウェー人は、自分たちがノルウェーに住む移民であった場合、どのような感じであるのかを想像できると思っている。しかし、私たちはもちろん知らない—ノルウェーにいる移民のほとんどが、自分たちの故郷の移民となった場合、どのような感じであるのか分かっていないことを。

私たち全員が、ある程度の先入観と疑いを持って、知らない人や環境に接している。そのように思うくらいが、ちょうどいい。

だがもし、あえて他のオープンな文化に直面するのであれば、価値あるものや、わくわくするものを見つけられるかもしれない。

私たちは、他の文化のやりとりの形式や礼儀正しきのコードに関する知識を得るだろう。そして思い違いをしたり、他の文化の人たちに対して間違っただ否定的な解釈をしたりするのを、その知識によって、より上手に避けることができるかもしれない。

なぜなら、知識というものは、理解や開かれた交流、友情を与えてくれるからだ。

他の人と会うとき、私たちは自分自身の反応や文化についても学ぶことができる。

人のふるまいは、文化的コードをたくさん含み、その多くはその人の言動や行動の中にある、暗黙のものである。

私たちにとって、当然のこととはつまり、自分たちの環境の中で身につけたものであり、他人に説明することができない。

というのも、自分が他とは違うと見なされる場面が、思った以上に存在するという事実を、理解している人は少ないからだ。

私たちは誤解を受けないために、自分たちのコミュニケーション手段や価値観、ふるまいが、どのように他人に解釈されるのかについて、自覚しなければならない。

他の角度や観点から評価された自分たちのふるまいを見ることで、人はより高い意識を持つ。

文化的なコードの実践を止めることが、この本の目的ではない。なぜなら、人々が異なる文化の特徴を持ち、少し異なった視点で礼儀正しくあるという事実は、好奇心をかきたてるものだからだ。

私たちが同じようになるべきである、ということも目的ではない。しかし、人々は他の考え方や価値観から、より多くの知識や洞察を得る。

多文化社会は、主流の文化をも変える。ノルウェー人は、文化の多様性を喜ぶ。しかしその一方で、礼儀正しさのコードの多様性も、身につけるべきではないだろうか。

私たちは「礼儀正しさはタダである！」という、古い格言を繰り返すことができる。

礼儀正しさと無礼さについて話すとき、興味深い問題点や疑問点をたくさん見つけることができる。しかし、完全に答えられる人は、誰もいない。

なぜなら、礼儀正しさは、正しいのか間違っているのかで扱われるものではないからだ。

そして当たり前なことだが、たった一つの民族のグループを基準にすることはできない。それは、ノルウェー人の場合でも同じだ。

しかし、ある一定の傾向について、比較したり話したりすることは、可能である。

もちろん、世界のいたるところで、人々のふるまいや感情、求めるものは異なる部分よりも同じ部分の方が多い。

そのため、次のようなことが確信を持って言えるのである。「他人を善意で解釈し、自分たちの行動や言動が良い意味で捉えられたのなら、私たちは笑顔のあ

る限り、たいてい好意的で礼儀正しいと見なされるだろう」と。

この文章の大半は、以前、Kulturbro Forlag 社から出版された、“Typisk norsk å være uhøflig?” (2005)という本の導入部分として書かれた。

この本の書き手は他に15人いる。彼らは15の国から来た移民たちである。その国とは、アルジェリア、フィンランド、フランス、インド、イラン、ジャマイカ、日本、中国、クロアチア、レバノン、モロッコ、ロシア、トルコ、アメリカ、ベトナムである。

彼らはユーモアのある、自虐的かつ批判的な目で、二つの文化的メガネを通して見た、ノルウェーの礼儀正しさについて語ってくれた。

それは例えば、あいさつの仕方やテーブルマナー、タブー、ユーモア、服装、ケアに関するものである。その他にも色々と話を聞くことができた。

書き手たちは、故郷の礼儀正しさのコードについて洞察したり、ノルウェーの文化と比較したり、異なる文化の間に並行するものを見出したりした。

また彼らは、ノルウェーのふるまいを分析し、自分の文化とノルウェーの文化に対して賞賛や批判を行なった。

それらの文章は全て、ノルウェー語で書かれたものである。